

『カラスのいいぶん』をよんで

さつき学園 四年 大西 真衣

この本を選んだ理由は、私たちの身近にいて、ゴミをあさるカラスの「いいぶん」って何だろう、ときになったからです。

筆者は、ある日カラスに散々な目にあわれ、カラスをにくらしく思うようになりました。どうにかカラスをギャフンといわせようと思った筆者は、そのためにはカラスの弱みをにぎるしかない、そんな気持ちでカラスをじーっと見ていたのに、気づけばカラスを面白がっていたそうです。

心にのこった場面は、カラスに時間わりがあることです。私はその場面を見て私もやってみたいと思い、自分の時間わりを作ってやってみることにしました。しかし、毎日決めたとおりにやるのはむずかしくて、一日しかできませんでした。私はできなかったけどカラスはできるのでカラスはすごいなあと思いました。

この本を読んで不思議に思ったことがあります。それは、筆者ははじめカラスがきらいだったのに、いつの間にかカラスのファンになつていたということです。筆者はカラスをギャフンと言わせたくてカラスのことを調べてたくさん観さつしました。そうするうちに、

カラスにも「いいぶん」があるのではないかと思うようになったのです。

私の身の回りでもよくけんかがおきたりします。私は自分や仲の良い友達の間方をするけど、けんかの相手にも「いいぶん」があるはずです。相手のことをよく知ったら、もしかししたら、私たちの考えが変わり、けんかもしないでよくなるのかもしれないと思いました。

筆者は、カラスをきらいなままにしないでカラスのことを調べて、観さつして、カラスの「いいぶん」に気づいたところがすごいと思います。

二〇〇一年から、二〇一九年の二〇年間に、ハシブトガラス退治が行われて、数がとてもへったそうです。すの近くにわなをしかけたり、ひなごとすをおとしたりしたそうです。それを読んで かわいそうだと思いました。みんながカラスのことをよく知って、カラスの「いいぶん」を聞けば、カラスをつかまえて殺す以外の方法があったかもしれません。

筆者のように、きらいな相手のことをよく知って「いいぶん」も聞いたら、もしかしたらけんかしていた友達とも仲良くできるかもしれない。きらいな人だらけよりも好きな人だらけの方が楽しいと思うので、私も筆者

みたいに相手の「いいぶん」を考えられる人になりたいです。

あなたの声がききたいを読んで

よつば小学校 四年 三宅 琉太

ぼくはこの本を読んで、テレビのボリウムをミュートにしてみました。それから、耳をふさいでみました。とても静かでした。なんだかさみしい気持ちになりました。音が無い世界がずっとつづくことは、ぼくには正直よく分かりませんでした。

この本の内容は、ちよう覚しようがいの両親に育てられた加奈子のお話です。

加奈子が小学生のころは、手話や口話法でしか話せないことにイライラして、よく自分の部屋で泣いていました。ぼくも最近、イライラしたら、ふとんの中で泣いています。母に声をかけられても意地をはってふとんから出て行けません。そんな時、母はふとんの中のぼくに向かって話をしてくれます。もし、手話や口話法でしか話せなかったら、顔を見たりしないといけないので、意地をはっている時のぼくは出来ないかもしれないと思いました。

加奈子が小学六年生の時にしようをとった作文の中で、「体の不自由な方がたをさ別しないで、親切にしてあげてください。」という文と、「ごせつが大きいと、つい、自分はそのんをしていると思いがちだけれど、実は、

ごせつを乗りこえる力がその人にそなわっていることを神様が知っていて、人生の勉強のためにごせつという宿題をあたえてくださったよ。」という文が、とても心にのこりました。ぼくは、ピアノを三才から習っています。五才の時からピアノコンクールに毎年出ていきましたが、小学三年生の時のコンクールでごせつをしました。必死に練習をしたけれど、きんちようして練習通りにひけませんでした。ひき終わった後、くやくして席で泣きました。その時「もうコンクールには出たくない！」と、母に伝えました。けれど、この本を読んで、もう一度、コンクールにちよう戦したいと思いました。

加奈子のお母さんも手話を広げる運動を始めました。市民こうざや小学校で手話を教えています。ぼくは、ようち園の時に初めて手話を教えてもらいました。「にじ」という歌の手話でした。小学校でも校歌の手話を習いました。あと、母からも習いました。スイミングの時や遠くにいる時に使える手話です。「大じよう夫？」「大じよう夫だよ」、「がんばって」などを習いました。遠くにいても手話で話が出来ると、うれしい気持ちになります。ちよう覚しようがいの人ではなくても、手話はとても役に立つと思います。もちろん、

ちよう覚しようがいの人のためにも大事なことだと思えます。みんなが覚えたら、幸せな人がふえると思うので、たくさんの人に覚えてもらいたいです。加奈子のお母さんみたいに小学校へ教えに来てくれるちよう覚しようがいの先生がいたらいいなと思いました。次は手話の本を図書室で借りたいと思います。